

二次元ドリーム文庫 / PDF立ち読み版



かがま
リトルウィッチ

小説 朋宮飯鹿 挿絵 のりたま

第一章	森の魔女	006
第二章	興奮×射精	023
第三章	密会×破瓜	050
第四章	拘束×強淫	077
第五章	傍観×望姦	115
第六章	逆襲×契約	164
第七章	淫汁×乱宴	197
第八章	その後のこと	244

登場人物紹介

Characters



リペリルリレーシュ・ エクステラ

通称リベル。見た目は少女にしか見えないが、強力な魔法を使いこなす最高クラスの魔女。森の中に一人で住んでいる。



ミューネ・ クロカス

テオットを護衛する戦士で、姉のような存在。何かにつけてテオットを叱るが、いつでも彼のことを気にかけている。



フィエミア・ アンゼロッタ

セクシーお姉さん風の魔女。リベルを一方向的にライバル視していて何度も戦いを挑むが、毎回返り討ちにされてしまう。



テオット・マイアコール

ある街の領主の三男坊。街を襲った『眠り病』から人々を救うため、特效薬を求めて森の魔女を訪ねる。

気恥ずかしさを誤魔化すように早口でまくし立てると、ミューネは少年の股間へと目を向けた。

「何よ……テオの馬鹿おちんぼ、ちよつと小さくなってるじゃない。それに、馬鹿魔女の愛液で汚れてるしっ。このままアタシの中に入れるなんて、冗談じゃないわよ！ 消毒しないと駄目ね……ん、んむっ」

「え？ ミュー姉さま、どうする——ひああっ!？」

「ん、んむう……れろれろ……むふう、んむ、んちゅっ。テオの馬鹿おちんぼ、臭いし酸っぱいし最低だわ……っ！ くちゅ、ぺろぺろ……本当に不味くて、駄目駄目ね……!! こんなに不味いの、リペルの手料理以来だわっ……んちゅ、ちゅるっ!」

熱心に舌で肉軸をしゃぶり、こびりついた悪女のラブジュースをこそぎ取らんと奮闘するミューネ。舌遣いはそれほど上手でもないが、射精したばかりでまだ敏感な少年の肉棒は彼女のぷりぷりした舌に感じてしまうのを止められない。

また、彼女の掌が玉袋をやわやわと揉みしだき、コリコリした感触の睾丸を擦りあわせて刺激する度に、少年の股間には疼くような痛みが走ってしまう。

海綿体に血が集まり、少女の狭い口腔の中で、むくむくとペニスが膨張していく。

「みゅ、ミュー姉さまあっ！ 姉さまの舌、気持ちいいよおっ!! くううんっ!」

「んあ……馬鹿おちんぼ、ムクムクって、おつきくなつたあ……顎、外れちゃいそう……うえ、えふっえふっ!」

硬度を取り戻した剛槍は鋭い穂先で咽喉を深々と抉り、思わず肉棒を吐き出してえづきを漏らしてしまふ少女。先端が唾液でしとどに塗れた肉棒は、てかてかと濡れて艶光りしながら悠然とそそり立っていた。

「けふけふっ……テオのおちんぼ、これで準備完了したわねっ」

頬を上気させ、涙目で少年のペニスを睨みつけながら、ミューネは口を乱暴に拭った。次いで、ばたばたと慌ただしくボタンを外すのさえもどかしいと、半ば破り捨ててるような勢いで服を脱ぐ。ボタンが千切れ飛び、少女の輝くばかりの白い裸身が晒される。

そして、仰向けに転がり絶頂の余韻に息を荒げるフイエミアの上に跨がり、四つん這いになるとずいと尻を突き出した。

処女を喪失してから数日ではあるがテオに開発され続けた身体は、少女らしくほっそりとしていて瑞々しかった身体のラインも徐々に女性らしい丸みを帯び、すらっとしていた臀部もむっちり脂が乗ってきているのが分かる。そのくせ腰はほっそりとして折れそうなほど細く、男ならばむしゃぶりつきたくなるような身体つきをしていた。

汗ばんだ少女の白い肌の艶かしさに思わず息を呑むテオ。

「え？ ミュー姉さま……？」

「ほら、テオ……あ、アタシの中もアンタの馬鹿おちんぼでいっぱいにしなさいよっ!」
少年のペニスをしゃぶる行為に興奮したのか、てらてらと蜜液で濡れて光る割れ目を寛げ、赤らんだ頬を隠そうともせずにつんとした態度で命令するミューネ。白い指が広げた

女。ポブカットにした細い金色の髪を振り乱して、ミューネは肉襷を押し広げる極太ペニスの熱さに咽び泣く。

「うあああ……姉さまのおま○こ、えっちする度に気持ちよくなつてくよおっ！ 柔らかいけど、きゆうきゆう締めつけてきてっ……おちんちん、たくさんのミミズに這われてるみたいでえっ……ひいいいいいっ!？」

テオの肉棒で開発されつつある蜜壺は、初めての時よりも柔らかくぬかるみペニスを優しく包み込む。また、内側の肉襷はそれぞれが複雑にうねりながら肉軸をしゃぶり、少年の肉棒を愛液で濡らしながら絶妙の力加減で締め上げる。

膣全体で吸いつかれ、腰骨にゾクゾク震えが走るほどの快感に脳裏を焼かれた少年は、犬のように荒い息を吐きながら嬌声を上げてしまう。

——にゆるうっ、ずぶんっ！ ぐちゅっ、ぶちゅうっ!!

「ひあああっ！ おちんぼがつ、テオのおちんぼ、アタシの奥までぐりぐりしてるうっ!! 駄目えっ！ くうんっ♪ 馬鹿おちんぼに挟られるう……テオのおちんぼでごりごりされてっ、ひぎっ！ あ、アタシっ、おかしくなるううっ♪」

一際深く刺されたペニスが子宮口にぶち当たる。子宮にズンと重く響く衝撃に、ミューネの目蓋の裏に星が飛び散った。

「あ……あああああああっ！ やめっ……て、テオおっ！ やめなさいっ、そんなにされたら……ううう、あ……アタシの子宮壊れちゃうっ！ 壊れちゃううううっ!!」

——ぐちゅっ、ぐりゅぐりゅ、じゅぶじゅぶっ！

感極まったように泣き叫び、戦乙女ツアルキリの如き美少女は自分よりも弱い年下の少年に喘がされるという屈辱的なシチュエーションさえ官能の材料にしてしまう。下の口からはだらだらと淫らな汁が溢れ、テオの腰が臀部に打ちつけられる度に飛沫を飛び散らせていた。

「はううっ!? み、耳噛んじゃ、駄目えっ！　そこ、弱いんだからあっ！」

——はむはむ……ぴちゃぴちゃ、れろおっ。

後ろから突かれながら、金髪の合間から見える丸い小さな耳を甘噛みされてしまったミューネは、一際甲高い悲鳴を上げて仰け反ってしまふ。耳朵を口に含まれたかと思うと、耳孔に尖らせた舌を挿し込まれてぴちゃぴちゃと舐られ、過敏なほど跳ね回る美少女。

——くちゅり、かぷっ。はむはむ、こりこりっ。

彼女の口から直接弱点と聞かされたせい、か、テオはこりこりとした耳の軟骨に前歯を立てて噛みついてくる。歯形が付くか付かないかといった絶妙な力加減で耳を責められ、ミューネは切れ切れに可愛らしい悲鳴を上げて腰をくねらせる。

「くひいっ！　ひあんっ、うひいい!?　だ、駄目だって、ばあっ！　やめ、やめて——」

少年のやけに執着したような弄り方はねちっこく、息も絶え絶えとなってしまう少女。僅かに残っていた余裕も今となつては全て消し飛び、どこにも存在しなかった。

「ひっ、ひいっ！　テオっ、そんなにしたら、アタシい……アタシいっ!!」

一際甲高い叫び声を上げて、目からポロポロと涙を流して首を振りたくるミューネ。

（駄目、駄目えっ！ これじゃ、我慢できなくなつて、魔法が、魔法が解け——ひああっ!!）
 そこまで考えたところで、少女の我慢は限界を突破してしまった。

淫らにのたうつ彼女の細い身体が突如として鮮烈な光を放つ。眩しさに思わず目を閉じてしまふ少年。甘噛みされたまま彼の口に含まれていた少女の耳が、ぐにぐにと粘土を捏ねるように形を変えていく。

（変身魔法が、解けちゃうっ！ アタシの本当の姿、テオにバレちゃうっ!）

「んあっ!? ね、姉ひやまつ……もごっ！ えほえほっ！ ろ、ろうひたのひゃ!? 姉ひやまの耳、エルフの耳みたいに尖つてりゅよっ!」

耳の先端がナイフのように尖り、少年の口蓋を突く。軽く咽せ込みながら、テオは必死に言葉を紡ごうとするが、それはミューネにとつては拷問のようにさえ感じられた。

「ひゃあああっ!? しゃ、しゃべらないでえっ！ テオの舌がっ、舌が耳に当たって……くひいひいひいひいっ!! やあっ！ あひん!! 耳、気持ちよすぎるううう!!」

ただでさえ性感帯だった耳介じかいが変形して、敏感さはそのまま、舌が触れる面積が増えてしまった。ミューネはガクガクと身体を震わせて耳殻じかくを襲う快感に悶もえてしまう。

——ぐちゅっじゅほっぶちゅっ、ぶぢゅぐぢゅっ！ じゅぶぶふううっ!!

愛液でぬかるんだ膺むちがきゆうきゆうと締めつけを増し、テオの肉棒にきつく絡みつく。

「ミュー姉さまっ……おま〇こ、締まってるよおっ!! くうっ……! そんなに締めつけられたら、気持ちよすぎて出ちゃううううっ!!」



「ひゃうっ!? こ、こらあっ! わらわになんというハレンチな格好をさせるのじゃっ!!」
恥ずかしさのあまり、リペルは慌てて露出した恥部を隠そうとする。

が、両手両脚がテンタクルに封印されているため、手で覆うどころか太股を擦りあわせることもままならず、彼女の幼い女性地帯は誰の目にもすっきり見えてしまっている。見た目が幼女そのままのため、触手に縛られた姿は犯罪を思わせる倒錯的なものとなっていた。

可憐な少女の淫ら姿を凝視し、大きく咽喉を鳴らしたテオの股間では、フィエミアとミューネの二人に大量に注ぎ込み萎びていたはずの肉棒が、再三硬度を取り戻してしまったほどだ。

「あーらあらあ? どうということもなにか言ってお股はぐしょぐしょですわよお?」
にやにやといやらしい笑みを浮かべたフィエミアが、リペルの股座に手をやって滴る蜜液を拭う。濡れた手を彼女の目の前にやると、かあつと顔を赤く染めて恥じらいを見せる。「うわあ……リペル、ちよつとえつちな汁、出すぎじゃない? そんなに出していると干からびちゃうわよ?」

甘酸っぱい濃密な芳香のするラブジュースは滾々と淫裂から湧き出ており、それを見て呆れたように呟くミューネ。じろじろと少女の未成熟な身体を見、指を伸ばすといきり立った乳頭を撫で擦った。

——くりっ、くりくりっ。くりゅっ。

小さな割れ目からはしとどに愛液が滴り落ち、尻の窄まりまで大洪水を起こしたように濡れてしまっている。

「うふふふっ♪ さあて、婆アも愉しませてあげたことですし、次はボウヤにもいい目を見せてあげないとですわねえ」

魔法使いの美女は、触手に縛られたままの少女を後ろから両手で抱え上げた。小柄な体軀はまるで羽のように軽く、フィエミアの細腕でも簡単に持ち上がる。

膝裏に手を入れて、幼女に粗相をさせる際の格好——リペルをM字に開脚させた状態でフィエミアはテオの前に立つ。そのまま、少年の鼻先近くまで湿り気で湯気を立てた股座を寄せ、思う存分幼穴を見せつけた。

「ボウヤ、婆アのおコチャマおま〇こはどうかしらあ？」

「や、やめいっ！ やめいと言うにつ！ テオも見ろでない！ 見るでないぞっ!？」
焦燥と恥辱を見せるリペルを他所に、じつと小さく幼いヴァギナを見つめるテオ。

こんもり恥丘の盛り上がった土手高の秘所には、ナイフで切れ込みを入れたような一筋の肉割れが刻まれていた。大きく開脚しているためか、小さなクラックは吊られて横に広げられて、内側に折りたたまれている肉ピラが充血してひくついているのが見える。

亀裂からは清水が滾々と湧き出ており、ラズベリを更に濃厚にした甘酸っぱい臭いが漂ってくる。

薄い尻肉の谷間には、ぽつんと点を打っただけの小さな窄まりがあった。皺がほとんど

「うふふふ……おしっこ漏らして、そんなに見られて興奮したんですね？ 人のことを変態だ露出狂だと散々罵ってくれた割には、貴方も十分に変態じゃないですか」

冷たい笑みを浮かべ、意趣返しを果たしたフィエミアは、テオへと顔を向けると一転して蕩けた雌犬の如き声音で少年へと提案をする。

「ボウヤ、この婆アのおま○こももう準備万端ですわよ」

「そうね。リペルもアンタとえっちしたくてしたくて堪らないみたいだし……この際だから、一思いにヤっちゃいなさいっ！」

にまにま笑みを浮かべ、ミューネも少女の扁平な乳房を揉みながらテオに命令する。

「ばっ、馬鹿者っ！ ミューネもやめぬかっ！ わらわの乳房を揉むのは——ひゃうっ!? だだだ、だからと言って舐める奴がおるかっ！ やめ、ひあああああああっ！」

——くちゅ、れるおっ。ぺろぺろ、くにゅんっ。はむはむっ。

胸骨に指が当たりそうな薄い脂肪を撫で回し、先端で勃起した乳頭を交互に口に含んで舐め、舌で転がし、歯先を立てない程度に甘噛みする。左右のニップルはミューネの唾液ですっかりべとべとだ。

ねちっこく乳首を責められ、リペルの言葉は次第に悦楽に蕩け不明瞭なものになっていく。

彼女の注意がバストに逸れたのを察し、フィエミアはテオに視線で挿入を促した。そして、僅かな逡巡を見せるも、少年は最後には小さく頷きを返す。

「えっと、そのっ……それじゃ、リペルの中に、おちんちん入れるよ……?」
いきり立ち今にも暴発しそうな極太の肉棒が、少女の可愛らしいサイズの肉畝に押し当てられる。ぷにぷにした恥丘の弾力に富んだ感触が気持ちよくて、思わずテオはほうと溜め息を漏らしてしまった。

「う、くう……っ！ リペルの、ミュー姉さまよりももつともつとキツイ……!?」
ぐ、ぐぐっ——狭くきついクレヴァスを肉棒が少しづつ掘り起こしていく。

入り口の閉じた洞穴を掘削する逞しい肉杭。真っ白い永久氷河に刻まれた亀裂は少しづつ幅を広げ、灼熱の剛棒に蹂躪されていく。

「リペルう……一気に、行くよっ！ くうっ!!」

「テオ、もつと優しく、して——つぎいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

清楚な形の肉ビラに啞え込まれたペニス。肉洞の途中で棒先端に一瞬抵抗を感じたが、テオは一気に腰を少女の中へと押し進めた。

——ぎゅっ、ぐぶぶっ。ぶぢいっ！

「あ、あああああああああああああああああああああつっ!?」

鮮血が一筋、白い肌の上を滴り落ちた。

目頭から大粒の涙が零れ、ふつくらした頬を伝い落ちていく。涙滴が細い顎から雫となつて飛び散った。狭すぎる未開通の肉洞に、サイズの合わない極太の肉棒を突き刺され、魂消るような悲鳴を上げてしまいうりペル。

浅い蜜壺は全てを侵略されても少年の剛直を飲み込むには足りず、半分程度しか腔に納まっていけない。

あまりの声の大きさに、挿入した少年はびくりと身体を震わせてしまう。

少女の股座に流れた初めての証に、フィエミアが不思議なものを見たと目を瞬かせる。

「あら、初物でしたの？ 婆アのくせに随分と初心ですね？」

「あはっ♪ リペルが二百年ずっと守り通してきた処女も、ようやく開通したわねっ♪ 未開通が長すぎて、『鋼鉄の処女』アイアンメイデンを通り越して、『金剛石の処女』ダイヤモンドだったわよ？」

「うぐっ、ぐう……！ わ、わらわの初めては、テオにあげると約束したのじゃ……！ くう、じゃから、大切に取っておくのは当然に決まっておる……ああああああっ!!」

ポロポロと涙を零し、苦痛に顔を歪ませながらも、小さな魔女は己の矜持を保ったまま告げる。鼻水と涙と涎でぐちゃぐちゃに汚れた顔、しかしそれでも今の彼女はとても綺麗に見えた。

「リペル、ありがとうね。僕なんかには、ずっと大切にしてきた処女をくれたこと……本当に、嬉しいよ……っ」

リペルのいじましい言葉に胸が高鳴る。今すぐにも腰のピストン運動を行いたい欲望を無理矢理抑え込み、艶のある銀髪を撫でるテオ。

小さな恋する乙女の中は経年劣化が微塵も感じられないほど未成熟で、ツルツルした腔壁はミューネの物よりも更にきつく締まり、万力のように肉棒を締めつける。海綿体が圧

迫され、リペルの膣洞の形に合わせるように整形されそうだ。

苦鳴が漏れそうになるのを堪え、少年は啄つばむようにリペルの唇を貪る。

「ちゅっちゅっ……ふう、むう……んむ、ちゅっ……つぶあ！ テオ、お主も入れたまま我慢するのは辛かるうに、わらわのことを考えてくれておるのじゃな？ その心は大変嬉しいのじゃが、子供が遠慮するものではないわい。わらわのちいぢやなおま〇こ、堪能するがよいぞ……」

互いの唾液でべとべとになった顔のまま、魔女はにっこりと笑みを浮かべた。

「ほらほら、ボウヤも婆アから許可が出たのですから、遠慮するものではなくってよ？」

「アンタなんて、どーせその馬鹿でつかいおちんぼくらいいしか自慢できないんだから、精々腰振ってリペルをひーひー言わせてやることねっ！」

そして、触手に縛られた乙女を抱えた二人の美女たちの言葉。

「うんっ！ それじゃ、リペル。動くねっ」

テオは頷きを返し、ゆっくりと腰を動かし始めた。

——ず、ずるっ、ずるずる……っ。

まずは、ゆっくりと肉棒を引き抜いていく。ペニスの穂先に付いた返しだが、肉洞の壁を外へと掻き出そうとする。勃起した幹に絡みついた肉襞は一途にしがみつき、内臓が引き抜かれるのではないかと思うほどの快感がリペルを襲う。

「お腹の中、テオのおちんちんに掻き出されそうじゃっ！ おうっ！ おま〇こが、裏っ

返るううっ！ おおううっ！！ おふうううううっ！！」

——じゅぶぶぶうっ！

そして、ペニスの雁首が見える所まで引き抜くと、今度は腰を前に動かして勢いよく蜜壺を突き上げる。侵入者がいなくなつて緊張を解いた蜜穴が乱暴に押し退けられ、奥底の子宮口を抉られてしまう。

「ひゃああああああつ！！ お腹の奥につ！！ テオのおちんちんが当たつておるうっ！！ 乱暴にされたら、壊れてしまうのじゃあああつ！！ ひああつ！！」

——ずる、ずるずる……ぐちゅうっ！ ずるう、ぐちゅぶっ！

そんな少女の金切り声を聞いても容赦せず、夢中で腰を前後に動かし続けるテオ。

「ひゃあつ！ ひゃうっ！ くひっ、ひああんっ！！ テオ、もつと、優しくっ……優しくしてえ！！ わらわ、初めてなんじゃ——つろおおおおおおおおおおおおつ！！」

涙を流し懇願する少女。しかし、少年のピストンは止まらない。むしろもつと激しさを増していく。腰を振る度に彼女の瑞々しい水蜜桃のような尻肉に下腹が打ちつけられ、白磁よりも白かったリペルの尻たぶはスパンキングされた後のように赤く染まっている。

「あははははっ！ リペルの尻、サルみたいに真っ赤っ赤よっ？」

リペルの乳首を捏ね練りながら、ミューネは少女の小さな耳に顔を寄せて囁く。オマケとばかりに、赤く滑った舌尖でちろりと耳孔を穿るのも忘れない。

「うひいっ！ な、何を言うかあ——ひうううっ！！ 耳駄目ええええええええええっ！！」

きゅうつと膣口の締めつけがきつくなり、少年のペニスを柔肉で圧迫する。

——くちゅっ、じゅぶじゅぶう、ぶぢゅっずぶりゅうっ！

キツイ締めつけに意識が飛びそうになるのを堪え、強引に蜜肉を穿りながら、テオは必死になって腰を動かす。壺の中で攪拌された泡立ち蜜液が、隙間からびゅっぴゅと噴き出した。

「り、リペルおねーちゃんの中、気持ちいいよおっ！」

懐かしい呼び名。少年の言葉に、リペルの子宮がきゅんと甘い疼きを上げる。それだけで強張っていた肉洞はとろとろに溶け崩れてしまうほどだ。

「い、今その呼び方は、卑怯じゃっ!? ひううううううっ！ と、蕩けておるう！ わらわの膣の中が、テオの言葉でめろめろになっておるううっ!!」

少年のたった一言の台詞が、数百年単位で使用されることのなかったリペルの蜜穴を心身両面から開拓し、急速に魔女の性感が昂っていく。ぞくぞくと背骨を駆け上る快感。

「ひおっ！ はおおうっ!! テオのおちんちんっ、わらわの子宮に届いておるう!!」

ぐりぐりと先端が子宮口に擦りつけられ、未熟な処女膣を責め立てる。

「刺さっちゃうのじゃあっ！ このままでは、わらわの子袋にテオのが刺さっちゃうっ!!」

数百年の生で初めて味わう女の悦びに歓喜し、すすり泣くりペル。

「リペルっ、リペルうっ……ひゃああっ!? みゅ、ミュー姉さまっ!? 何するのっ——」

初々しいセックスをする二人の姿に嫉妬を感じたのか、やたら不機嫌な顔をしたミューネの掌が、肉割れの中に納まらない少年の肉棒を鷲掴みにした。もう片方の手は皺だらけの陰囊を包み、こりこりと睾丸を揉み解している。

「ねっ、姉さまっ!? そんな、今おちんちん抜かれたらっ……気持ちよすぎてっ！ 頭が、おかしくなっちゃうよお！ おちんちんから精液出ちゃうよおっ!!」

ジンジンと玉袋が熱を帯び、射精前のきゅっつと引っ込むような感覚が走る。

「うふふふっ♪ 『森の魔女』がこんな可愛らしいボウヤに負ける姿なんて、きつと誰も信じてくれないですよ？ 無敗の魔女様が敗北する姿、私に見せてくださいな♪」

そして、リペルはフィミアに乳首を捏ねられ、いつしか大粒の真珠サイズまで勃起した肥大陰核を抜かれてしまい、お漏らしをしたように潮を噴いてしまった。

——ぷちゅっ、ぶしゅうううううっ！

「らめにゃあああああっ♪ そんらにされひゃらあ、わらわ、いきっぱなひになっひゃうのらあっ♪」

蜜壺をペニスで抉られながら敏感な雌肉を嬲られ、絶頂に達したまま、イキっぱなし状態の魔女は、呂律の回らない舌で叫び続ける。

「出るっ！ リペルのおま○この中で、精液出るよおっ!! ちいぢゃなお腹が破裂するくらい、いっぱい出ちゃうよおっ!!」

「ほら、さっさと出さないよ！ 堪えてたって、最後には出ちゃうんだからねっ！」



幼い性器が収斂し、肉棒をぎゅうぎゅう締めつける。全てを子袋へと飲み込んだりペルの胎は急激に膨れ上がり、まるで小玉のスイカを入れたように丸くなってしまふ。

「あひゃあ……テオのおちんちんじるで、わらわのおにやか、ばんばんにゃあ……♪」

初めての性行为、初めての膣内射精に恍惚とした笑みを浮かべて、幼い魔女は肉棒を啜え込んだままのいやらしい姿で、幸福感に満たされ気を失った。

十分に熟れきった美女の美味しそうな完熟果実がひしゃげて少年の陰茎を上下に扱く。谷間に溜まった汗の雫がローションのように滑りをよくしているのが分かる。シルクのようなきめ細かい肌にも埋もれ、ペニスが乳肉に揉み込まれてシャフトを膨張させていた。

「ああもうっ！ アンタ一人でいい思っているんじゃないわよ！ アタシも混ぜなさい!!」
先を越され、美女が愛しい少年に奉仕する姿を見せつけられていた二人の少女。

自分にはない大きな乳房で彼を悦ばせている姿に、ミューネがとうとう癩癩を起こした。
「あ、ちよ、いきなり何するんですのっ!? そんな、おっぱい横から乱暴に——！」

「うるさい、おっぱいお化け！ ああもう、テオのおちんぼ、ほとんどアンタに占領されちゃってるじゃないの!? 上からはキツイから、アタシは……」

フィエミアの乳房を押しつけて僅かな隙間を作ると、妖精の少女はそこに身体を割り込ませる。そして、少年の股間にぶら下がった皺だらけの陰囊を口に含んだ。

「テオ、このアタシがこんなことまでしてあげるんだから、感謝しなさいよっ……はむ、れる……んちゅ……んむう、あむあむ……」

花びらでも唾えるのが一番お似合いだろう、ミューネの小さく可憐な唇が卑猥な肉塊を齧る姿は、テオの心を奮わせるほどいやらしく見える。

「ちゅぱちゅぱ、あむっ……んふう、テオ、アンタちゃんと裏つ側まで綺麗に身体洗ってるの？ ここら辺、ちよつと臭いし、しょっぱい味するわよっ！ まったく、こーやってアタシが綺麗にしてあげないと駄目駄目なのねっ！」

「う、うううう……ちゃんと、綺麗にしてる、よお……っ」

皺を引き伸ばしながら、汗ばんだ玉袋の皮を丁寧な舐る。皮越しに舌の上で睾丸を転がし、コリコリと歯を立てて甘噛み。男の弱点を弄られ、切ない声を上げるテオ。

フィエミアとミューネの二人がかりで責められ、少年の上擦り声が次第にえずくように甲高い響きを帯びていく。

そんな姿を見せられて、面白くないのは一人だけ輪に入れていないリペルだ。

「くううーっ！ わらわの場所がないではないかっ！ ええい、わらわもテオのおちんちんが舐めたいのじゃ、場所を空けぬか！」

ベッドの上で地団駄を踏むが、二人の美女は一顧だにせず熱心に彼の逸物を舐り続ける。場所は自分で探せ、奪えるものなら奪ってみると言わんばかりの態度。ふうつと頬を膨らませたりペルは、難しい顔で少し考え込み、そしてぱつと表情を明るくした。

「ふっふっふっ……っ わらわの名はリペルリレーシュ・エクステラ！ 『森の魔女』と名高い存在ぞ！ この程度、わらわの行動を縛る枷にもならぬのじゃっ！ それ、『我が身体を風は運ぶがよい』」

ふわり——どこからともなく吹き込んだ優しい風が少女の小さな身体を持ち上げた。

魔法で浮き上がったリペルが空中でくると逆さになると、被っていた帽子がシートの上にもふわりと落下する。

そして、猛禽のような眼差しで狙いを定めた狩人は、テオの真上に移動すると急降下。

フィエミアの乳の谷間から姿を覗かせたペニスの先端へとむしゃぶりついた。

(え? ちょっと、何? リペル、マントの下——なんにも着てないのおっ!?)

逆さになり、身体全体を包み込んでいたマントがはだけて、テオの視界に白い姿が入る。そう、普段なら黒い服に身を包んでいる少女の白い姿。ガーターとストッキングは穿いている。しかし、今のリペルはそれ以外身に着けていない裸身だったのだ。薄い胸板の上に乗ったサクランボも、ふっくらしたお腹にちよこんと刻まれたへそも、ぶにぶにと柔らかそうな恥丘も、少年には全て丸見えとなっていた。

「う、うわあっ!? リペル、なんて格好して——んぶうっ!?”

「おとなしくせぬか! まったく……口が暇ならば、わらわのアソコでも舐めておれっ」
逆さになって空に浮かんだりペルが、股間を少年の顔にぐいぐいと押しつける。ぴったりと閉じた淫裂にテオの鼻が食い込み、荒い鼻息が尖った雌しべをくすぐる。

「ん、くう……そうじゃ、お主はわらわだけを見ておればよいのじゃ……ちゅぶ、もっつ」
くすぐったそうに身を振ったリペルは、あんぐり大きく口を開けて極太の肉棒を頬張る。ぴちゃぴちゃと美味しそうに舌を動かし、亀頭から滲み出た先走りの汁を舐め取る少女。
——ぴちゃぴちゃ、くにゅ、ぺろっ、れるれる、はむはむ……。

パンパンに膨らんだ亀頭をリペルに舐められ、心棒が通っているのかと思うほど硬く張り詰めたシャフトはフィエミアの乳房で撫で上げられ、今にも破裂しそうな玉袋はミューネが執拗に転がしている。



「むぐぐっ!? ひあ、そんなにされたら……くうんっ! すぐに、出ちゃうよおっ!」
三人がかりでペニスを責められる強烈な快感に、テオは切羽詰まった声で泣き言を漏らす。

「うふふふふっ。早く私たちにボウヤのミルクを飲ませてくださいな♪ ほらほらっ」
「はむはむ……れる、ぴちゃっ……もう、せっかく気分が乗ってきたってのに! アンタつてば、本当に我慢が利かない駄目おちゃんぽね! もうちよつとくらい我慢しなさいよっ!!」
胸肉で肉棒の極太幹を擦りながら、美女は艶冶な笑みを浮かべて少年の逸物を優しく扱く。それとは逆に、エルフの美少女は憎まれ口を叩いて睾丸をぱくりと口腔に咥え込む。

——ちゅぷ、ちゅぱっ……くぎゅうっ。ぐちゅぐちゅっ。

「もごもご……なんじゃ、もういつてしまうのか? 相変わらず早いのか……れるおっ」
口の周りを唾液と先走りでべたべたに汚したりペルが呆れたように呟き、雁首の裏を舐めた。舌先が敏感な筋を巧みにくすぐって、痙攣したテオは幼い割れ目を鼻で思いっきり抉ってしまう。

「くひゅううんっ! こ、これテオっ、そこは敏感なのじゃからもつと丁寧に扱わぬかつ……くひゃあああああつ!? わらわのおま〇こがっ、テオの鼻に、犯されてるうっ!」

かぶっ——丁度口に当たった何かに、夢中で齧りついてしまうテオ。硬く尖ったそれに歯を立てて、ギリギリときつく噛むことで悦楽を堪えようと努力する。

「そ、そこおっ! わらわの、お豆ちゃんがあ——! あひゃああああああああつっ!」

——ぶしやあああああああああああつ！

秘芯を嘔まれ、甲高い悲鳴を上げたりペルの割れ目から、勢いよく噴き出す黄色い水飛沫。過大な刺激を受け、膀胱の栓が壊れたように黄金水が噴出して少年の目や顔を叩く。

尿に濃く溶けたアンモニアが眼球粘膜を刺激し、目を襲う痛み涙を流して悶えるテオ。

「くうう……出る、おちんちんから精子出るよおつ！ びゆるびゆる精液出るううつ!!」

——ぶびゆるっ、びゆるるっ！ びゆくくっ、ぶばああつ!!

突然噴きかけられたリペルの尿に塗れ、我慢の限界を超えた少年の活火山が爆発した。尿道から噴き出したスペルマが奔流となって三人の身体に降り注ぐ。

「ああ……この味ですわあ……♪ 咽喉に絡むほど濃厚で、アソコが濡れちやいそうな雄の味……♪ これからポウヤに犯されるって、頭じゃなくて身体に……私のいやらしいおま○こに教えてくれる、えっちなお味ですわあ……♪」

全身に本日初の濃口精液を浴びたフィエミアは感極まった声で呟き、淫乱な雌の表情を見送っていた。ちゅばちゅばと音を立てて精液を舐め取る姿が艶めかしい。

「ひゃああつ！ テオのおちんぼ汁う……びゆるびゆるって、きつたなくてあつつい精液かけられてるう……！ ど、どうしてくれるのよお……アタシ、テオのぼっちいおちんぼ汁で、どろどろになっちゃったじゃないのよお……っ♪」

濃密に漂う精液の臭いにやられたのか、とろりとした目で白濁まみれになったことに悦びの声を上げるミューネ。嫌がっている口振りを取ろうとするが、声に混じった喜色が隠

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>